

<研究報告>

動名詞の意味の多様性*
—多様性の原因と意味の根幹—

龍野 祐輝 **信州大学大学院教育学研究科**

キーワード：動名詞，名詞的意味，動詞的意味，不特定な場面，継続・想起

1. はじめに

動名詞は TO 不定詞の名詞的用法と同じく動詞の目的語になる。そのため，多くの研究者はしばしばその意味の違いを比較研究している。(1)は学校教育でもしばしば引用される意味の違いの例で，(2)のような訳が与えられている。

- (1) a. I remember to lock the door.
- b. I remember locking the door.
- (2) a. 私はドアに鍵を忘れずにかける。
- b. 私はドアに鍵をかけたことを覚えている。

(1)の対比は主に以下のように説明されている(江川 1991 p.362)。¹

「不定詞は時間的に未来を指向する動作・状態を示す。動名詞は時間的に中立であるが，過去を指向することもできる」

(1)のような例は意味の違いがはっきりと出ているため，教育上でも言及されることが多い。それでは動名詞の意味は「時間的に中立であるが，過去を指向することもできる」だけなのか，と問われれば答えは「No」である。

- (3) We have postponed going on a picnic.

(3)の文では“going on a picnic”はまだやっていない時間的に未来のことを指しているにもかかわらず動名詞が用いられている。このことから，「TO 不定詞＝未来」，「動名詞＝中立 or

* 本稿の執筆にあたって，信州大学教育学部英語教育専修の田中江扶准教授から貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げたい。また，本稿を完成させるまでに議論を重ねてくれた英語教育専修の大学院生の中嶋渉，滝澤士朗の両氏にも心からの感謝を捧げたい。

¹ ここで言う時間的未来・過去とは文の時制のことではなく，動詞の行為時点を基準にした時間のことである。(1)の例文で言えば，(1a)は“remember”よりも未来のことを指すのでまだやっていないことである。(1b)は“remember”よりも過去のことを指すのですでにやったことである。

過去」といった説明では不十分であることが分かるだろう。

本稿の目的は過去の研究で指摘されている動名詞の意味を分類し比較した上で、動名詞の意味の多様性の原因と意味の根幹を捉えることである。本稿では比較として TO 不定詞と動名詞の両方のデータを扱うが、動名詞の意味に焦点を絞って分析する。

2. 動名詞の持つ意味

まずは動名詞の意味について、様々な研究者の論を確認しておこう。詳細まで言及すればそれぞれ異なる論を展開しているが、以下では共通の概念をもとに分類している。

2.1 一般論

安田(1970)は TO 不定詞と動名詞の意味の違いとして、場面の有無があることを指摘している。

- (4) a. I like to read a book.
- b. I like reading a book.

安田によれば(4a)は「本を読みたい」というある特定の場面における気持ちがあり、(4b)は「読書が好き」という場面のない一般論を表す。そのことがよく分かる例として次の文を挙げている。

- (5) I like reading books, but I don't like to read a book now.

(5)の文では動名詞と TO 不定詞が一文に共存していて、「私は読書は好きだが、今本を読むのはいやだ」という解釈ができる。このことから、TO 不定詞は特定の場面を想起させる働きがあるが、動名詞にはそれがないといえる。

さらに、岩垣(1980)は「百聞は一見に如かず」という諺を用いて次のように指摘している。

- (6) a. Seeing is believing. = Seeing, as a general rule, is followed by belief.
(見ることは概して信じることになる。)
- b. To see is to believe. = Seeing is immediately followed by belief.
(見ればすぐ信じるようになる。)

岩垣によれば、(6)のように動名詞の場合は一般的な叙述であり、TO 不定詞の場合は特定の場面を想起した上での言及となっている。

2.2 過去

第1節で示した(1), (2)の例文がこれに値する。このタイプの説明をしている研究者は非常

動名詞の意味の多様性

に多いので代表して前述の江川(1991)の説明を以下に再掲する。

- (1) a. I remember to lock the door.
- b. I remember locking the door.
- (2) a. 私はドアに鍵を忘れずにかける。
- b. 私はドアに鍵をかけたことを覚えている。

「不定詞は時間的に未来を指向する動作・状態を示す。動名詞は時間的に中立であるが、過去を指向することもできる」

2.3 実現

シェン(1997)によれば、TO 不定詞は[-実現]、動名詞は[+実現]を示すとしている。

- (7) a. I forgot to take the medicine. [-実現]
- b. I forgot taking the medicine. [+実現]

(7a)の TO 不定詞の場合、「忘れる」という行為が起こった時点では「薬を飲むこと」はまだ起こっていないことを表している。したがって、「私は、薬を飲み忘れた」という意味になる。一方(7b)の動名詞の場合、「忘れる」という行為が起こった時点では「薬を飲むこと」はもうすでに起こっていると解釈され、結果、「私は薬を飲んだことを忘れた」という意味になる。

「実現」に関する論は安藤(1975)や Close(1981)等多くの著書・論文に見られるため、こちらもポピュラーな仮説と言える。

2.4 消極的

Duffley(2000)は TO 不定詞が前置詞 to に由来することから TO 不定詞を「方向」で説明している。

- (8) a. I want to talk to Mary about it.
- b. I am considering working with him on it.

Duffley によれば、(8a)は“talk to Mary about it”が実現に向かうという方向がある。一方、(8b)では“working with him”を考えているだけで主語の気持ちは表さないため、実現に向かうという方向がないとしている。言い換えれば、TO 不定詞は積極的であり、動名詞は消極的であると言える。また、濱田(1999)は同様に消極性について述べている。

- (9) a. I like to go for a walk on Sundays.
- b. I like sitting in the garden when it is fine.

濱田によれば、(9a)の「日曜日に散歩に行くのが好きだ」にはそうしたいという積極的な感情がある。一方、(9b)の「天気の良い日には庭で座っているのが好きだ」には「天気の良い日」という条件下でそうしたいと思わされるという消極的感情があるとしている。

2.5 継続

江川(1991)は begin と start に続く動名詞～ing について次のように述べている。

- (10) a. It began to rain
b. It began raining.

begin to ～は「開始」を示すのに対し、begin ～ing は“It began to rain”+“It was (still) raining”のように、「開始+継続」を示す。さらに、次のような start の例も示されている。

- (11) a. He started to speak, but was soon interrupted.
b. He started speaking, and kept on for hours.

(11a)のように TO 不定詞の場合は継続を含意しないので「すぐに遮られた」という文が後に続くことができる。これに対して(11b)はその後にも続くような文（文脈）で使われる。

2.6 リアル感

大西・マクベイ(2008)は(12)のような TO 不定詞と動名詞が使い分けられている文脈を示している（(13)は(12)の訳）。

- (12) A : Just back from the office. I hate working on a Sunday.
B : Right. I hate to work on a Sunday, too.
(13) A : 仕事から帰ってきたところ。日曜日に働くの、ものすごくいやだよ。
B : そうだよな。僕だって日曜日に働くのはいやだよ。

(12)の A のような動名詞は「イキイキとした行為」を表していると説明している。つまり、(12)の A の文は単に一般論として「日曜日に働くことが嫌いである」ということを述べているのではなく、働いてきたばかりでその様子を「イキイキ」と頭に浮かべながら述べているため、動名詞がより適任だとしている。

一方、(12)の B のような TO 不定詞には、動名詞のような「出来事がイキイキと展開する感触」はまるで感じられないと指摘している。この文は「日曜日に働くことが嫌いである」という、漠然とした一般論を述べているにすぎず、B は自分が日曜日に仕事をしてきたわけではないため、TO 不定詞がより適任だとしている。

動名詞はその場で実際に起こっていなければならないということではなく、「リアルに起こっている感じがする」ということである。

動名詞の意味の多様性

- (14) a. I like playing with my kids in the park.
b. I like to play with my kids in the park.

(14a)では話し手は子どもと遊ぶ様子をリアルに思い浮かべながら述べていると指摘されている。つまり、過去の出来事であってもその様子を「イキイキ」と思い浮かべることができれば動名詞が適任になるということである。

大西・マクベイ(2008)の論をまとめると、TO不定詞は「漠然とした一般論」を表すのに対し、動名詞は「イキイキ感」「リアルな想像」を表していることになる。

2.7 動名詞の意味のまとめ

以上の動名詞に関する各説をまとめると以下のようなになる。

- (15) 動名詞 = 一般論, 消極 / 過去, 実現 / 継続, リアル感

(15)の各概念を見るだけでも動名詞の意味の多様さが見て取れる。特にスラッシュを境界に明らかに異質な意味を表している。各々の真偽についてはここでは問わない。少なくとも特定のコンテキスト下においてこれらの意味が表れているとすれば、どうしてこのような多様な意味が動名詞に存在しているのだろうか。そして、動名詞の意味の根幹はどこにあるのだろうか。以下ではこの点について考察していく。

3. 多様性の原因と意味の根幹：伊関(2013)の論

動名詞が(15)のような多様な意味体系を持っている理由を説明するのに有力な論を伊関(2013)が中尾・児馬編(1990, pp.187-8)および児馬(1996, pp.104-8)の動名詞と現在分詞の歴史の変遷説に基づいて述べている。以下に伊関の論を要約して述べる。

古英語では V-ing(動名詞)と V-ende(現在分詞)があった。古英語における動名詞 V-ing は現代のそれとは大きく異なる。古英語における V-ing のこの特徴は現代英語における派生名詞とほぼ同等の性質を持っている。

- (16) a. John's refusing the offer suddenly surprised us. (動名詞)
b. John's sudden refusal of the offer surprised us. (派生名詞)

つまり、古英語における動名詞 V-ing は(16b)の派生名詞のように直接目的語を取らず、副詞と共起できない名詞的な文法構造を持っていたということである。一方、(16a)のような現代英語における動名詞 V-ing は本来現在分詞が持つ動詞的性質に近いものである。このことから、中尾・児馬編(1990, pp.187-8)および児馬(1996, pp.104-8)では以下のように説明している。

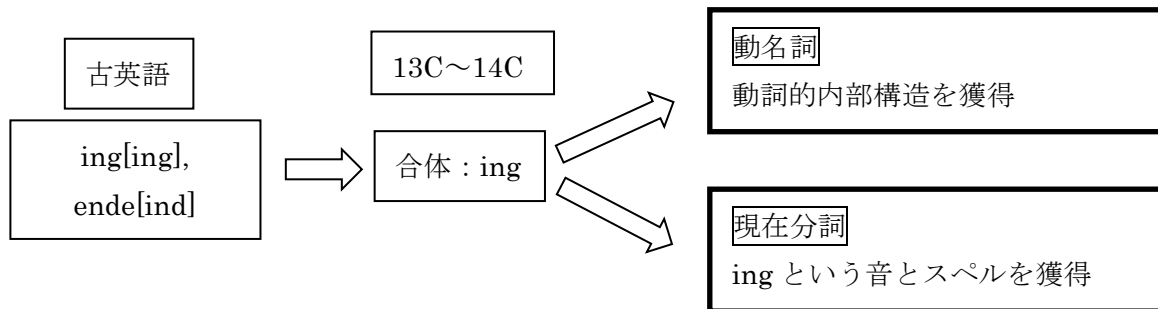


図 1: ing の歴史的変遷

つまり、古英語では個別にスペルが与えられていた動名詞 **V-ing** と現在分詞 **V-ende** が類似の発音を持つことから 13C~14C の間に混同し、音韻が **V-ing** に統一された。さらに、混同の結果、本来動名詞 **V-ing** が持っていなかったはずの動詞的内部構造を獲得したということである。

伊関(2013)は上記の歴史的変遷から、動名詞は本来持っていた名詞的性質に加え、動詞的性質を持っていた現在分詞とのスペルの統一により、現在分詞の持っていた意味を獲得したと指摘している。つまり、現代英語の動名詞には古英語からの名詞的意味と現在分詞に由来する動詞的意味が共存しているということである。この観察を基に、伊関は動名詞には現在分詞由来の動詞的性質であるところの「イキイキ感」があらゆる文についてまわると主張している。

(17) I remember posting your letter. (あなたの手紙を出したことを覚えている。)

(17)の例文では手紙を出したことを「ありあり」と思い出していて、ここに現在分詞に由来する動詞的性質が存在している。しかしながら、この説明にはいくらか問題があることも指摘している。

(6a) Seeing is believing.

(6a)のような諺などの場合、場面をイキイキと思い出していると解釈することもできるだろうが、諺の性質上、一般論といった方がより自然である。

以上が伊関の論であるが、この歴史的変遷が(15)の動名詞の多様さの原因であると言える。伊関の主張としては名詞的意味の動名詞でありながら、常に動詞的意味である「イキイキ感」が併存しているとしている。しかしながら、上述したように(6a)は必ずしも「イキイキ感」が併存しているとは考えにくい。また第 2.1 節の「一般論」は特に第 2.6 節の「リアル感」、すなわち大西・マクベイが捉えるところの「イキイキ感」とはおおよそ正反対の概念である。そのため、常に「イキイキ」が併存しているとする伊関の分析に

は無理がある。故に、動名詞の意味に関しては(15)の概念すべてが当てはまるのではないと言える。そこで、次節で動名詞の意味について再検討し、動名詞が持つ多様な意味の根幹となっている概念を考察する。

4. 意味の根幹の考察

動名詞の意味の多様さの原因は第3節の伊関(2013)の歴史的考察から説明できると考える。しかしながら、動名詞の意味の根幹については第3節で述べた通り、伊関(2013)の論では不十分であると考ええる。動名詞の根幹について考えるうえで、意味が同時に存在していると考えるのは不自然な点があるため、「意味は複数存在していて場合によって使い分けられている」と仮定する。例えば(12)の例を見てみよう。

(12) A: Just back from the office. I hate working on a Sunday.

B: Right. I hate to work on a Sunday, too.

2.6 節で見たように、(12)の A の動名詞“working on a Sunday”は「日曜に働いた」という「過去」のことであり、「実現」した行為を表す。また、大西・マクベイ(2008)が指摘しているように、働いてきたばかりでその様子を「イキイキ」と頭に浮かべながら述べているため、「リアル感」も表す。さらに、hate(嫌う)という動詞とともに使われていることから、(12)の A は“working on a Sunday”に対して「消極」的な感情を抱いている。つまり、(12)の A の動名詞は(15)の「過去」「実現」「リアル感」「消極」の4つの意味を表している。(12)の A の動名詞がこれらの意味を共存して持てることから、これらの意味には「共通項」があると考えられる。

この「共通項」を考える際に、動名詞は「実現された過去」を表すということに注意する必要がある。

(18) *He failed passing the exam. (cf. He failed to pass the exam.) (*は非文を指す)

(18)の動詞“fail”は「実現」されなかったという意味を持つが、この fail は動名詞(passing the exam)を取ることができない。つまり、動名詞は「実現」されたことを含意しない動詞とは使われない。(12)の A の発言“working on a Sunday”も、(18)の“passing the exam”もともに「過去」を表すが、前者は実際に実現した行為であるのに対して、後者は実現していない。このことから、「過去」を表す場合でも「実現」されているかどうかは重要であることが分かる。

この点を考察するにあたって、「消極的」を指摘する濱田(1999)と「リアル感」を指摘する大西・マクベイ(2008)、さらに伊関(2013)の論に共通して指摘されている「思い出す」「思い浮かべる」「思わされる」という点が重要になる。つまり、動名詞の場合、ある行為を記

憶から発話時点に「想起」していることになる。これを言い換えれば、動名詞が表す出来事を「継続」している行為として思い浮かべているということである。

(1) b. I remember locking the door.

(1b)では単に「ドアに鍵をかけた」という過去を「覚えている」のではなく、「ドアに鍵をかけている」情景を「想起」している。さらに、“remember”という動詞とあいまって、その情景を覚えていると解釈できることになる。つまり、単純に時間的に過去の出来事を指しているのではなく、時間的に過去の出来事を思い起こしている、つまり「想起」しているということである。この分析に基づけば、動名詞が未来を指す場合があることも説明できる。

(19) I anticipate learning a great deal from you.

(20) I expect to be there this evening.

(19), (20)の“anticipate”や“expect”はともに「～することを予想する」といった意味を持っているが、前者は動名詞を、後者は TO 不定詞をとる。どちらの例文でも目的節は時間的未来のこと（まだ実現されていないこと）を指している。しかしながら、Longman Dictionary of Contemporary English (third edition)によると、“anticipate”の定義は以下のようになる。

(21) Anticipate: to expect that something will happen and be ready for it.

(下線は筆者)

フォーマリティの違いを除けば(21)に見られる通り，“anticipate”は“expect”の意味に加えて“be ready for it”という意味が加えられている。つまり，“anticipate”は“expect”に比べて確実性の高い未来、つまり予期した未来の実現に確信がある状態を含意している。よって、予想した内容が「現実味」を帯びていると解釈することができる。このことから，“anticipate”などの確実性の高い未来を指す動詞は、動名詞が表す出来事を仮想的に現在「継続」しているものとして「想起」していると捉えているといえる。このように、過去の出来事も未来の出来事も「継続」しているものとして想起することができるため、ともに動名詞で表すことができる。

さらに、「想起」する際に、そのきっかけとなる要因が明記されている場合がある。例えば濱田(1999)は以下の例文を挙げている。

(9) b. I like sitting in the garden when it is fine.

動名詞の意味の多様性

この文では“when it is fine”という要因があり、それが「引き金」となり“sitting in the garden”という出来事が「継続」しているものとして「想起」されている。つまり、要因が明記されていることによって「そうしたいと思わされる」という側面を濱田は捉えたと言える。そのことから、「消極的」という側面は「想起」を異なる側面から見たものと言える。また、「想起」によってその出来事における感情を呼び起こすこともある。そのことが(12)の A の発言における動名詞にも現れている((12)を以下に再掲する)。

(12) A : Just back from the office. I hate working on a Sunday.

B : Right. I hate to work on a Sunday, too.

A は直前に行った「日曜日に働く」という行為を「継続」しているものとして思い起こしながら「嫌いだ」と述べているのである。この結果、実際に働いたことによる身体や精神の疲労、休日を楽しむ者との比較による劣等感、自分の身に起きている不条理に対する怒りだとかそういった感情などを同時に「想起」しているのである。実際にそれを行っていない B にはそういった過去もなければ感情も経験していないことから動名詞を用いることは不適切になる。これが大西・マクベイが捉えた「リアル感」という解釈の正体であると言えよう。

以上のことから、動名詞はある出来事を「継続」しているものとして「想起」する働きがあることが分かる。よって、(15)の「過去」「実現」「リアル感」「消極」の4つの意味は現在分詞に由来する現在の動作の「継続」を拡張したものとして捉えることができる。つまり、これらの4つの意味の根幹には(15)の「継続」の意味があることになる。この「継続」の場合、特定の場面を「想起」していることになるが、動名詞がもつ(15)の「一般論」という意味においては、場面が特定されていないため、「一般論」は他の意味とは異なるといえる。そこで、「一般論」としての動名詞はやはり名詞的意味の動名詞に由来するものとして、異なって存在していると見るべきである。

5. まとめ

第4章の考察から、動名詞の意味の根幹は「一般論」と「継続」に大きく二分することができる。動名詞の「継続」は、「想起」を用いて「実現された過去」から「実現に確信のある未来」まで拡張的に含意できる。加えて、その内容に伴う心的感情などを同時に「想起」することができる。それとは別に場面を特定しない「一般論」としての動名詞も存在している。以上の点をまとめると以下のようなになる。

(22) I. 名詞的意味 — 「不特定な場面の一般論」

II. 動詞的意味 — 「特定の場面の想起による継続」

伊関(2013)の歴史的変遷説に基づく と, (22)の名詞的意味は古英語からの動名詞の名詞的性質に由来し, 動詞的意味は混同した現在分詞の動詞的性質に由来するものである。つまり, 動名詞の意味の多様性の原因は 13C~14C における動名詞 V-ing と現在分詞 V-ende の統一による意味の混同であり, 動名詞の意味の根幹はそれらに由来する(22)の2つの意味であると言える。

参 考 文 献

- Alan Malcolm Arthur (1995) *Longman Dictionary of Contemporary English*, Pearson Japan, Tokyo, third edition.
- 安藤貞雄 (1975)「意味の指導と意義素」『英語教育』24:9, 12-14, 大修館.
- Close, Reginald Arthur (1981) *English as a Foreign Language*, George Allen & Unwin, London, third edition.
- Duffley, Patrick J (2000) “Gerund versus Infinitive as Complement of Transitive Verbs in English,” *Journal of English Linguistics*, 28:3.
- 江川泰一郎 (1991)『英文法解説—改訂三版—』東京: 金子書房.
- 濱田英人 (1999)「不定詞補部と動名詞補部の認知構造について」『文化と言語』第50号, 207-229.
- 伊関敏之 (2013)「動名詞を中心とした世界—不定詞および現在分詞との比較を中心に—」『人間科学研究』第9号 1-16.
- 岩垣守彦 (1980)『英語の要点／中』静岡: 増進会.
- 児馬修 (1996)『ファンダメンタル英語史』東京: ひつじ書房.
- 中尾俊夫, 児馬修(編著) (1990)『歴史的にさぐる現代の英文法』東京: 大修館書店.
- 大西泰斗, ポール・マクベイ (2008)『NHK新3か月トピック英会話ハートで感じる英語塾〜英語の5原則編〜』東京: NHK出版.
- シェン, ブレント・デ (1997)『英文法の再発見』東京: 研究者.
- 安田一郎 (1970)『NHK続基礎英語 英語の文型と文法』東京: 日本放送出版協会.

(2016年 1月20日 受付)
(2016年 2月10日 受理)